

主要国の野菜の生産動向等

調査情報部

1 中国

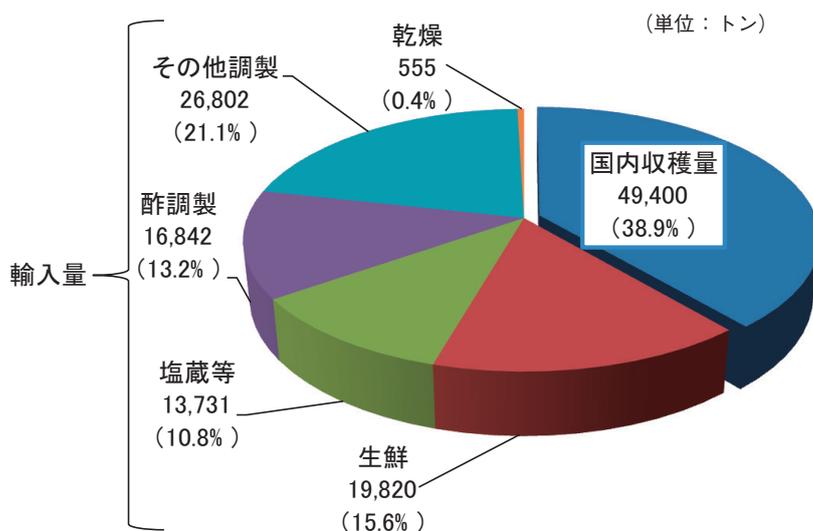
日本が輸入するしょうがは、約8割が中国産であることから、今月号では、山東省を中心に中国のしょうがの生産動向等を紹介する。

(1) 日本における中国産しょうがの位置付け

日本のしょうが供給量の約6割は輸入品となっている。小売向けの生鮮品が中心の国内産と異なり、輸入品はさまざまな形態があり、それぞれが一定の割合を占めている（図1）。一例としては、「塩蔵等」には、貯蔵・加工に適するよう塊茎のみの状態で

塩漬けしたもの、「酢調製」には、すし店の「がり」、「その他調製」には、チューブ入りしょうがの原料、「乾燥」には、チップや粉末状のしょうがの原料などが該当する。一方、それぞれの形態ごとに国別の輸入量を見ると、いずれの形態も、中国は主要な輸入先となっており、塩蔵等、その他調製では、タイ、ベトナムなどの近隣諸国から輸入されている（表1）。

図1 日本のしょうがの供給量（2015年）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：農林水産省「野菜生産出荷統計」、財務省「貿易統計」）

表1 しょうがの形態別国別輸入量（2016年）

生鮮（冷蔵）			塩蔵			酢調製			その他調製			乾燥		
国名	数量 （トン）	金額 （百万円）	国名	数量 （トン）	金額 （百万円）	国名	数量 （トン）	金額 （百万円）	国名	数量 （トン）	金額 （百万円）	国名	数量 （トン）	金額 （百万円）
中国	20,813	1,898	タイ	12,128	1,665	中国	16,874	3,405	中国	23,642	4,588	中国	512	526
タイ	898	133	中国	5,833	606	ベトナム	253	44	タイ	2,333	398	インド	52	21
インドネシア	221	36	ベトナム	297	31	タイ	25	7	台湾	1,522	496	ラオス	44	155
フィリピン	10	2	—	—	—	インド	4	1	ベトナム	400	83	タイ	0.1	0.2
台湾	9	2	—	—	—	パキスタン	2	0.4	インドネシア	56	30	—	—	—
その他	9	4	その他	0	0	その他	0	0	その他	60	35	その他	0	0
合計	21,961	2,077	合計	18,258	2,301	合計	17,158	3,458	合計	28,012	5,631	合計	608	702

資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：財務省「貿易統計」）

なお、本稿中の為替レートは1元＝17円（2017年1月末日T T S相場：16.90円）を使用した。

(2) 生産動向

中国のしょうがの主産地である山東省におけるしょうがの生産は、濰坊市、青島市、煙台市、萊蕪市、臨沂市、日照市などを中心に行われている（図2、写真1）。

図2 山東省のしょうが主産地分布図



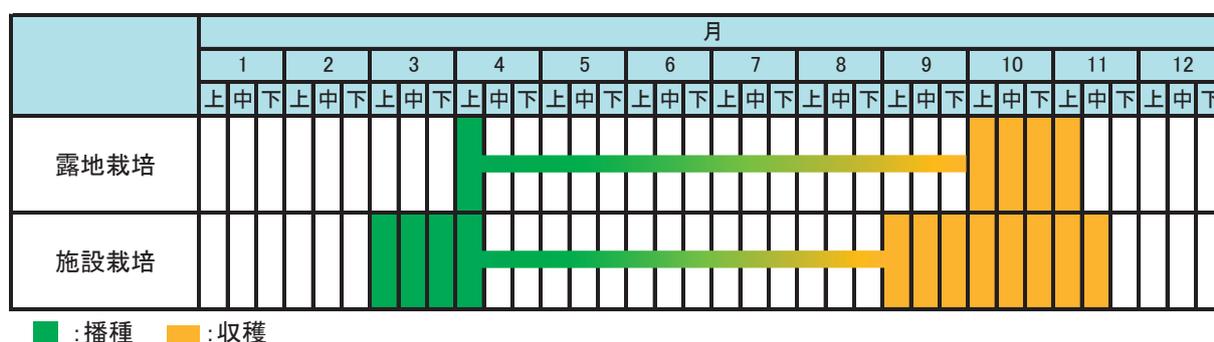
資料：聞き取りにより機構作成



写真1 山東省で収穫されたしょうが

山東省では、同省の気象・土壌環境に適した品種とされる「^{めんしょう}面姜」が主に利用されている。また、露地栽培が中心であり、4月上旬に播種^{はしゅ}し、10月から11月上旬にかけて収穫される。一部では施設栽培も行われており、3月上旬に播種を開始し、9月から11月中旬にかけて収穫される（図3）。

図3 山東省のしょうがの生育ステージ



資料：聞き取りにより機構作成

注：本図は、播種、収穫が最も集中する時期を表しており、それぞれの作業は前後の時期にも実際には行われているとみられる。

近年の生産動向を見ると、2013年は、収穫期の干ばつなどの影響から、収穫量は前年を下回った。その結果、2013年後半に価格が上昇したことから、2014年は、作付面積、収穫量ともに前年を上回ったが、それを受けて、再び価格が下落し、2015

年は、作付面積、収穫量ともに前年を下回った。2016年は、作付面積は前年をかなり大きく上回ったものの、6月の季節外れの雹^{ひょう}、7月から8月の水害、9月の干ばつと気象災害にさらされたことから、収穫量は3.4%の増加にとどまった（表2）。

表2 山東省のしょうがの作付面積、収穫量および単収の推移

年	作付面積（千ha）		収穫量（千トン）		単収（トン／10a）	
		前年比（増減率）		前年比（増減率）		前年比（増減率）
2012年	63.3	▲ 13.6%	3,300	▲ 14.3%	5.21	▲ 0.7%
2013年	53.3	▲ 15.8%	2,400	▲ 27.3%	4.50	▲ 13.6%
2014年	61.3	15.0%	4,000	66.7%	6.53	44.9%
2015年	54.2	▲ 11.6%	3,250	▲ 18.8%	6.00	▲ 8.1%
2016年	62.3	14.9%	3,360	3.4%	5.39	▲ 10.1%

資料：山東省農業庁種植業管理处、現地聞き取り

注1：2016年は見込み。

注2：2012年から2014年は、山東省農業庁種植業管理处調べ。2015年～2016年は現地聞き取りによる。

注3：単収は収穫量を作付面積で除して算出。四捨五入の関係から、項目間の計算において、誤差が生じることがある。

(3) 生産コスト

10アール当たり生産コストの動向を見ると、2016年は1万5622元(26万5574円、2013年比10.2%増)と、かなりの程度増加している(表3、写真2)。項目

別に見ると、近年の中国の野菜生産で恒常化している土地代と人件費の増加に加え、肥料農薬費の増加も見られている。一方、種苗費は減少しているが、しょうがは自家採種が一般的であるため、しょうがの相場の変動を反映したものとなっている。

表3 山東省のしょうがの10アール当たり生産コスト

項目	2013年(元/10a)		2016年(元/10a)		2016年/ 2013年比 (増減率)
		円換算		円換算	
土地代	2,099	35,683	2,699	45,883	28.6%
種苗費	4,798	81,566	2,999	50,983	▲ 37.5%
肥料農薬費	3,899	66,283	4,347	73,899	11.5%
資材費	150	2,550	150	2,550	0.0%
農機具費	225	3,825	225	3,825	0.0%
人件費	2,924	49,708	5,127	87,159	75.3%
その他	75	1,275	75	1,275	0.0%
合計	14,170	240,890	15,622	265,574	10.2%

資料：山東省農業庁種植業管理处、現地聞き取り

注1：2016年は見込み。

注2：四捨五入や為替換算の関係から、項目間の計算において、誤差が生じることがある。

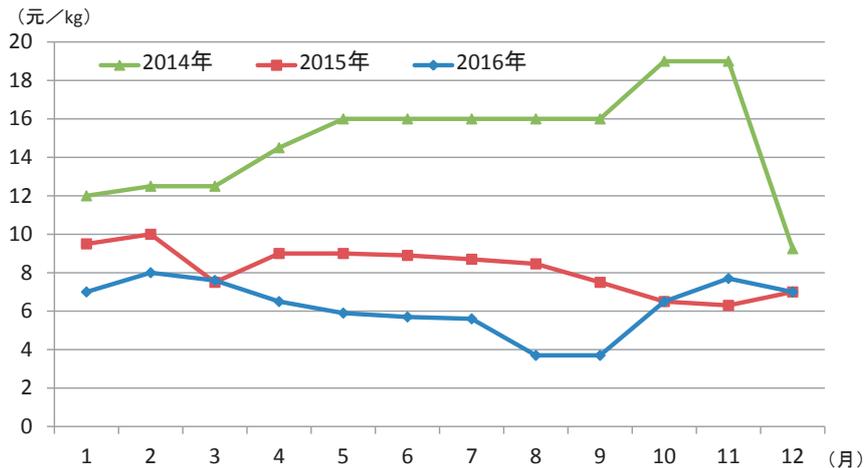


写真2 農場でのしょうがの箱詰めの様子

(4) 価格動向

近年の山東省のしょうがの価格推移を見ると、2014年は、前年の収穫量の減少を受けて高水準で推移したものの、2014年の収穫が豊作となったことを受け、同年末に急落した。その後は、比較的小幅な変動の後、2015年の収穫量が低水準となったことから、2016年後半以降は、上昇傾向となっている(図4)。こうした傾向を受け2016年末以降、生産者、流通業者ともにしょうがの売り惜しみをやる傾向が強まっているとみられており、2017年前半の価格は、上昇傾向で推移すると見込まれている。

図4 しょうがの卸売価格の推移（山東省）



資料：山東済南七里堡野菜総合卸売市場

(5) 国内向け出荷動向

山東省で収穫されたしょうがの8～9割は、国内向けに出荷されており、北京、天津など比較的近い華北の大都市に加え、華南の大都市にも仕向けられている。ただし、国内仕向けのうち1～2割は、冷蔵倉庫に貯蔵され、翌年に販売される。また、卸売価格の変動に応じて、国内仕向け比率は変動しており、卸売価格が高水準で推移した2014年には、94%に達した。

なお、しょうがは長期貯蔵が可能であり、生産者や流通業者は相場に応じた出荷調整を行っている。

(6) 輸出動向

山東省産のしょうがは、日照市などの加工・輸出企業に集められ、さまざまな形態で輸出されている（写真3）^{（注1）}。しょうがの輸出量は、国内の卸売価格に大きく左右される。2014年は、11月ごろまで国内卸売価格が高水準で推移したため、輸出量は減少した。一方、2015年以降は、卸

売価格の低下を受けて、輸出量は増加傾向にあるものの、世界的にしょうがの需要は低調に推移しており、今後も国内相場に応じた変動が予想される。

輸出先は、未破碎のもの^{（注2）}は、南アジア、米国、中東などさまざまな地域に輸出されており、日本向けは比較的少ない（図5）。一方、破碎されたもの^{（注3）}は、日本向けが約半分を占め、その他の主な輸出先は欧米各国となっている（図6）。



写真3 加工輸出企業におけるしょうがの洗浄の様子

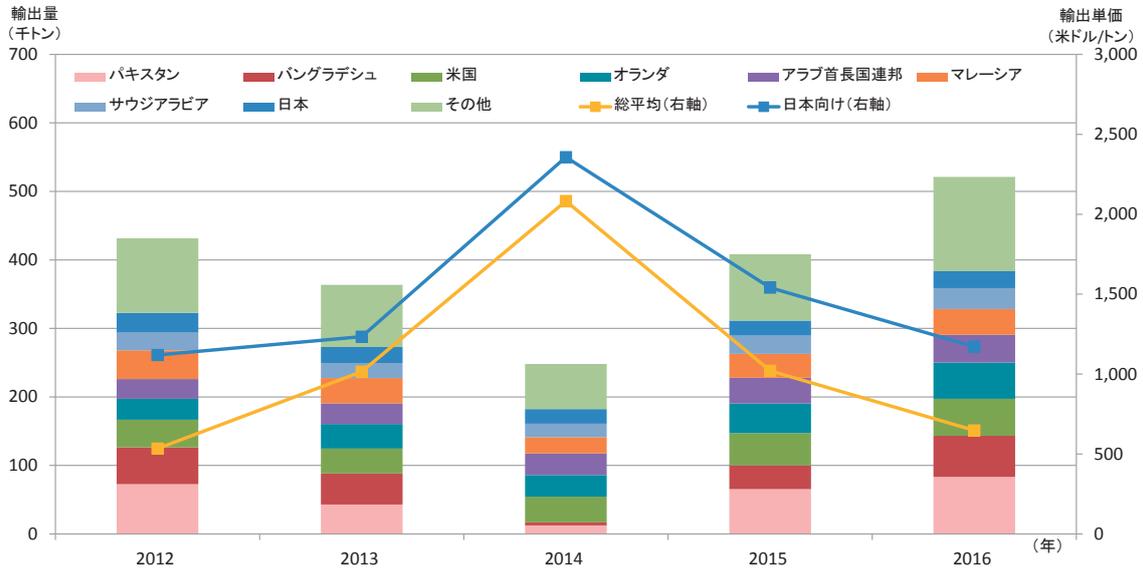
注1：中国の関税分類上、データは、「未破碎」または「破碎」の分類で取得可能。

注2：生鮮品や多くの塩蔵品など、塊茎の形状の

ままのもの。

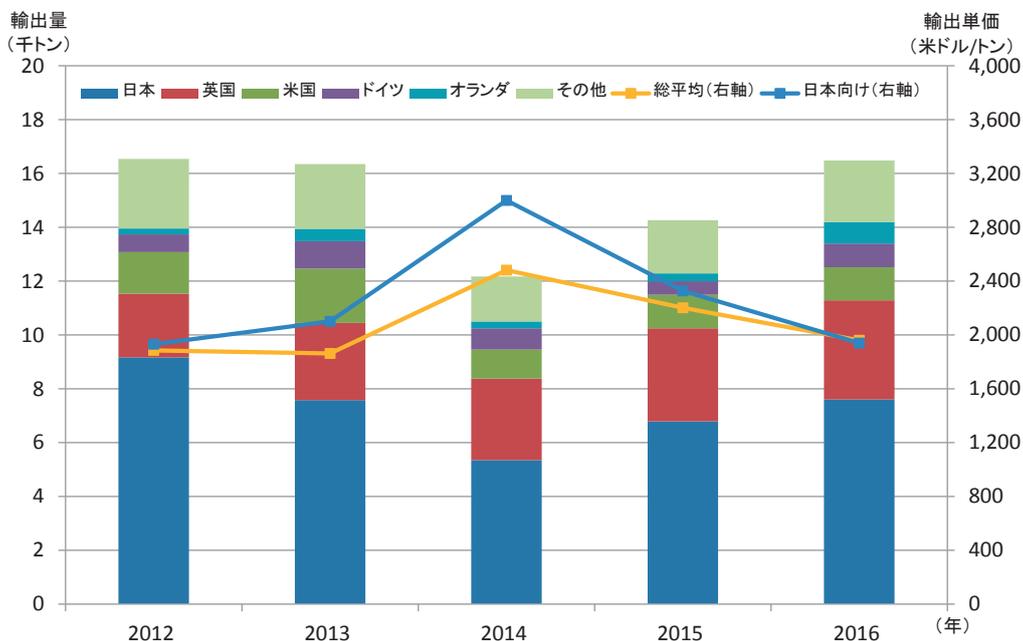
注3：一部の調製品など、粉状などに加工されたもの。

図5 中国のしょうが（未破碎）の国別輸出量および輸出単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」
注：H Sコードは09101100。

図6 中国のしょうが（破碎）の国別輸出量および輸出単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」
注：H Sコードは09101200。

2 米国

米国からは、日本への輸出が多いブロッコリー、レタス、セルリー（セロリ）（以下「セルリー」という）、たまねぎについて、それぞれの主産地であるカリフォルニア州またはワシントン州の動向などを紹介する。また、トピックスとして、近年のたまねぎの生産概況を報告する。

(1) ブロッコリー、レタス、セルリーおよびたまねぎの生産動向

ア ブロッコリー

(ア) 作況および作付面積

2017年1月初旬、カリフォルニア州は全域で豪雨に見舞われた。1月の第2週、サンタバーバラ郡サンタマリアでは、湿気による花蕾腐敗病の発生が報告された。ま

た、サンタマリアおよびモンレー郡では、圃場の冠水によりトラクターが使用できず、直播作業に約1週間の遅れが生じた。このため、4月下旬の供給不足が見込まれている。

なお、本稿中の為替レートは、1米ドル＝115円（2017年1月末日T T S相場：114.81円）を使用した。

図1 カリフォルニア州の地図



資料：機構作成

(イ) 生産者価格

2016年11月の生鮮ブロッコリーの生産者価格は、出荷量の増加に加え、前年の価格高の反動により、前年同月比44.8%

安の1キログラム当たり0.79米ドル（91円）となった（表1）。

2017年1月の第2週時点では、インペリアル郡産やリバーサイド郡産は、1カー

トン（14個入り）当たり約8.5米ドル（1キログラム当たり0.82米ドル：94円）で取引されていた。なお、サンタマリア産は高値で取引されていたとされるが、取引量が少なかったため、米国農務省は市場価格を公表していない。

また、1月の豪雨によりカリフォルニア州産の品質にバラツキが生じ、出荷量が減少したため、ブロッコリー生産量が全米第2位のアリゾナ州産の価格も上昇傾向にある。

表1 全米の生鮮ブロッコリーの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
生産者価格	1.43	1.87	1.12	0.59	0.68	0.87	1.06	1.09	0.80	0.62	0.81	0.83	0.79

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

(ウ) 対日輸出動向

2016年11月のブロッコリーの対日輸出量は、前年同月比6.4倍の3837トンと、2016年の最大値を更新した（表2）。この要因として、台風や降雨による日本での

国産品の品薄が考えられる。また、輸出単価は同3.1%安の1キログラム当たり1.24米ドル（143円）と、前月からやや上昇した。

表2 米国産ブロッコリーの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
輸出量	602	152	648	1,561	2,562	3,024	2,117	2,780	2,387	2,761	3,628	3,829	3,837
輸出額	769	222	738	1,916	2,980	3,630	2,478	3,485	2,944	3,331	4,013	4,574	4,740
単価	1.28	1.46	1.14	1.23	1.16	1.20	1.17	1.25	1.23	1.21	1.11	1.19	1.24

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

(エ) 東京都中央卸売市場のブロッコリー入荷量および価格

2016年11月の東京都中央卸売市場の米国産ブロッコリーの入荷量は、前年同月比2.7倍の150トンと前年を大幅に上回った。卸売価格は1キログラム当たり351

円となり、大きく上昇していた前月から下落した（表3）。なお、同月、同市場で最も入荷量が多かったのは埼玉県産であるが、前年同月比61.9%減の約508トンであり、卸売価格は、米国産を大幅に上回る同501円であった。

表3 東京都中央卸売市場の米国産ブロッコリーの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
入荷量	55	18	4	33	178	162	143	117	115	118	160	189	150
卸売価格	306	173	331	335	314	353	323	343	340	310	379	398	351

資料：東京都中央卸売市場

イ レタス

(ア) 作況および作付面積

カリフォルニア州では、12月は寒波により結球レタスの供給が限られ、1月初旬時点では、結球レタスおよびロメインレタスの出荷量はやや少なく、リーフレタスは、出荷量は安定していたものの、品質は例年並みとの報告があった。1月は豪雨の影響によるカビの発生も見られ、モントレイ郡やサンタマリアでは、直播作業に遅れが生じているため、4月上旬のリーフレタス、4月中旬の結球レタスに供給不足が見込まれている。

(イ) 生産者価格

2016年11月の結球レタスの生産者価格は、生産量の増加に伴う需給の緩みから、前年同月比55.3%安の1キログラム当たり0.59米ドル（68円）と、前月からは上昇したものの、なお低調に推移した（表4）。

1月の価格は、需要が落ち着いていることから、低い水準で推移している。1月第2週の時点では、結球レタスは1カートン当たり約6.5米ドル（1キログラム当たり約0.29米ドル：約33円）、ロメインレタスは同約8米ドル（同0.35米ドル：約40円）、グリーンリーフレタスは同約7米ドル（同0.31米ドル：約36円）で取引されていた。

表4 全米の結球レタスの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
生産者価格	1.32	1.14	0.93	0.46	0.34	0.46	0.72	0.57	0.57	0.46	0.46	0.45	0.59

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

(ウ) 対日輸出動向

2016年11月の結球レタスの対日輸出量は、前年同月比2.8倍の505トンで、輸出単価は前年同月比7.9%安の1キログラム当たり1.05米ドル（121円）であった（表5）。一方、結球レタス以外のレタスの対日輸出量は、同約100倍の417トンで、

輸出単価は同36.7%高の1キログラム当たり2.16米ドル（248円）であった（表6）。輸入量増加の要因として、米国産の出荷が安定していることに加え、台風による国産品の不足と価格高騰があるとみられる。

表5 米国産レタスの対日輸出量および輸出額（結球レタス）

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
輸出量	182	49	128	176	144	120	197	205	253	330	389	458	505
輸出額	207	51	144	208	203	171	223	216	245	342	435	490	531
単価	1.14	1.04	1.13	1.18	1.41	1.43	1.13	1.05	0.97	1.04	1.12	1.07	1.05

資料：米国農務省海外農業局（USDA/FAS GATS Database）

表6 米国産レタスの対日輸出量および輸出額（結球レタス以外）

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
輸出量	4	22	68	80	40	39	27	14	29	4	50	1,197	417
輸出額	6	42	81	169	121	60	29	12	77	12	99	2,478	899
単価	1.58	1.95	1.20	2.12	3.03	1.52	1.07	0.86	2.63	3.24	1.99	2.07	2.16

資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS GATS Database)

(エ) 東京都中央卸売市場のレタス入荷量および価格

2016年11月の東京都中央卸売市場の結球レタス以外の米国産レタス（ロメインレタス、フリルレタスなど）の入荷量は、

前年同月比4倍の1.6トンで、卸売価格は1キログラム当たり106円（前年同月比76.2%安）であった（表7）。なお、同月には、米国産結球レタスの入荷はなかった。

表7 東京都中央卸売市場の米国産レタスの入荷量および平均卸売価格（結球レタス以外）

(単位：トン、円/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
入荷量	0.4	0.4	0.4	6.0	0.5	0.5	0.2	0.5	0.2	0.5	0.4	1.6	1.6
卸売価格	445	413	518	535	518	518	518	399	518	518	518	239	106

資料：東京都中央卸売市場

ウ セルリー

(ア) 作況および作付面積

1月、カリフォルニア州南部で定植が行われているが、豪雨により、作業に影響が出ている。また、1月第2週時点では、品質は良好と報告されていたが、品薄感があつた。

増加により、1キログラム当たり0.59米ドル（68円）と前月から上昇したが、前年同月比では34.4%安となった（表8）。

1月第2週の時点では、カリフォルニア州南部の生産者から品薄感が報告されたものの、価格は安定して推移した。サンタマリア産は1カートン（24茎）当たり約8～8.5米ドル（1キログラム当たり0.29～0.31米ドル：33～36円）、オックスナード産は約9米ドル（同0.33米ドル：38円）で取引された。

(イ) 生産者価格

2016年11月のセルリーの生産者価格は、感謝祭（11月24日）に向けた需要の

表8 全米の生鮮セルリーの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
生産者価格	0.90	1.32	1.48	0.66	0.41	0.44	0.58	0.41	0.39	0.36	0.35	0.41	0.59

資料：米国農務省全国農業統計局 (USDA/NASS)

(ウ) 対日輸出動向

2016年11月のセルリーの対日輸出量は、前年同月比74.3%増の774トンで、

輸出単価は、前月から上昇し、前年同月並みの1キログラム当たり0.77米ドル（89円）となった（表9）。

表9 米国産セルリーの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
輸出量	444	230	332	451	788	672	607	555	697	602	597	620	774
輸出額	324	166	319	387	661	526	533	534	635	511	400	417	594
単価	0.73	0.72	0.96	0.86	0.84	0.78	0.88	0.96	0.91	0.85	0.67	0.67	0.77

資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS GATS Database)

(工) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2016年11月の東京都中央卸売市場の米国産セルリーの入荷量は、前年同月比37.5%増の33トンで、卸売価格は同22.8%高の1キログラム当たり210円で

あった(表10)。なお、同月に最も入荷量が多かったセルリーは静岡県産(280トン)であり、価格は米国産を大幅に上回る同355円であった。

表10 東京都中央卸売市場の米国産セルリーの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
入荷量	24	25	13	15	23	26	25	25	26	27	26	32	33
卸売価格	171	178	290	309	228	215	222	208	204	201	209	214	210

資料：東京都中央卸売市場

エ たまねぎ

(ア) 作況および作付面積

ワシントン州では、たまねぎの収穫は10月中旬にほぼ終了した。USDAによると、たまねぎ生産者の85%が9月下旬時点の生育状況を良好と報告しており、収量も多く、過去数年で最も良い生育状況であったとされている。一方、収穫作業における労働力が不足し、これに伴う人件費の上昇で生産コストが押し上げられたとする報告もある。

(イ) 生産者価格

2016年11月の生鮮たまねぎの生産者価格は、特にワシントン州の作柄が良好であったことから、1キログラム当たり0.15米ドル(17円)と、安値で推移した(表11)。

1月中旬時点のワシントン州産およびオレゴン州産の黄たまねぎは、1カートン(約18キログラム)当たりコロツサルが約7~8米ドル(1キログラム当たり0.38~0.44米ドル:44~51円)、ジャンボが6.5~7米ドル(同0.36~0.39米ドル:41~45円)、ミディアムが6.5米ドル(同0.36米ドル:41円)であった^(注)。また、白たまねぎは、ジャンボが17~18米ドル(同0.94~1米ドル:108~115円)、ミディアムが15~17米ドル(同0.83~0.94米ドル:95~108円)であった。

注：全米たまねぎ協会によると、たまねぎの大きさの規格は、コロツサル(直径9.5センチメートル以上)、ジャンボ(同7.6センチメートル以上)、ミディアム(同5.1~8.3センチ以上)が最も一般的な大きさとされている。

表11 全米の生鮮たまねぎの生産者価格

(単位：米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
生産者価格	0.26	0.27	0.32	0.34	0.33	0.47	0.57	0.61	0.59	0.28	0.22	0.17	0.15

資料：米国農務省全国農業統計局 (USDA/NASS)

(ウ) 対日輸出動向

2016年11月の生鮮たまねぎの対日輸出量は、前年同月比78.4%増の1022トンで、輸出単価は前年同月並みの1キログラム当たり0.44米ドル(51円)であった(表12)。この要因として、台風の被害に

よる北海道産の減少が考えられる。

また、同月の乾燥たまねぎの対日輸出量は、前年同月比4.9%増の302トンで、輸出単価は同1.6%安の同2.52米ドル(290円)となった(表13)。

表12 米国産生鮮たまねぎの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
輸出量	573	488	492	161	15	27	38	53	320	969	1,226	1,147	1,022
輸出額	313	228	245	106	28	43	47	11	232	544	495	528	451
単価	0.55	0.47	0.50	0.66	1.87	1.59	1.24	0.21	0.73	0.56	0.40	0.46	0.44

資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS GATS Database)

表13 米国産乾燥たまねぎの対日輸出量および輸出額

(単位：トン、千米ドル、米ドル/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
輸出量	288	466	86	246	351	136	373	381	198	200	336	402	302
輸出額	738	1,100	226	617	846	342	925	922	496	512	817	993	762
単価	2.56	2.36	2.63	2.51	2.41	2.51	2.48	2.42	2.51	2.56	2.43	2.47	2.52

資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS GATS Database)

(エ) 東京都中央卸売市場の入荷量および価格

2016年11月の東京都中央卸売市場の米国産たまねぎの入荷量は、前年同月比20倍の6.1トンであった。また、卸売価格は同92.4%安の1キログラム当たり101円と、高級レストランなどからの需要によ

り、単価の高いたまねぎが輸入された前年同月を大幅に下回った(表14)。なお、同月に最も入荷量が多かったのは北海道産(1万318トン)であり、価格は米国産を下回る同73円であった。

表14 東京都中央卸売市場の米国産たまねぎの入荷量および平均卸売価格

(単位：トン、円/kg)

	2015年		2016年										
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
入荷量	0.3	0.2	5.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	1.2	47.4	7.8	4.7	6.1
卸売価格	1,335	1,301	98	1,102	1,103	1,062	1,074	1,094	287	148	161	236	101

資料：東京都中央卸売市場

(2) トピックス

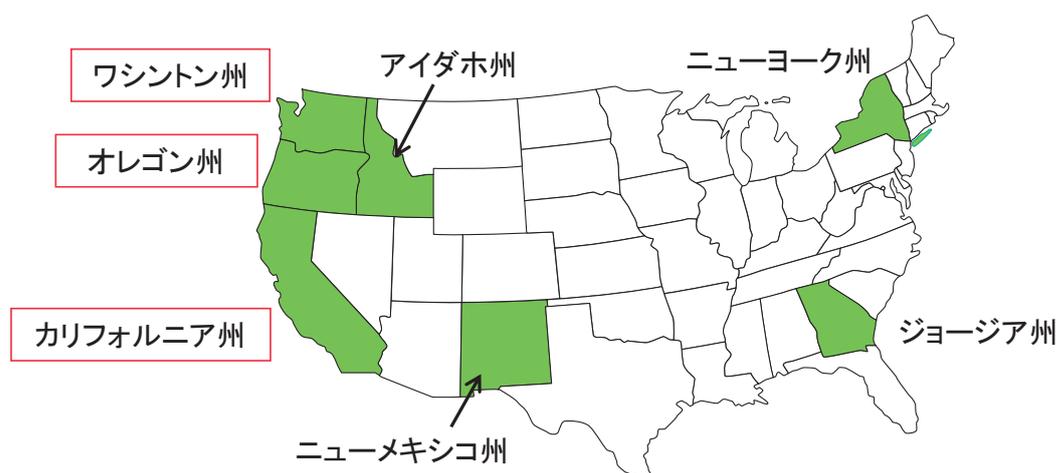
～近年のたまねぎの生産概況～

米国のたまねぎの主要生産地は、カリフォルニア州、ワシントン州、オレゴン州であり、これらで総生産量の約7割を占める。2008年からの州別生産量の推移を見ると、カリフォルニア州の生産量は、干ばつなどの影響によりやや減少傾向で推移している一方、ワシントン州は、作付けおよび収穫面積に大きな変化は見られず、ほぼ横ばいとなっている（図3）。

ワシントン州では、夏の終わりから秋に

かけて収穫され、乾燥・貯蔵される貯蔵用たまねぎが生産量の9割以上を占め、春から初夏にかけて収穫されて、すぐに出荷される非貯蔵用たまねぎの生産量はごく少量である。2015年のワシントン州のたまねぎ生産量は、66万トンと、猛暑や病害の発生などがあったものの、過去10年のうち2012年に次いで多かった。なお、同州は2014年から2015年の中ごろまで干ばつ傾向となったが、2015年から2016年にかけて山頂付近の積雪が増えたため、かんがい用の水不足が解消されたとする生産者もいる。

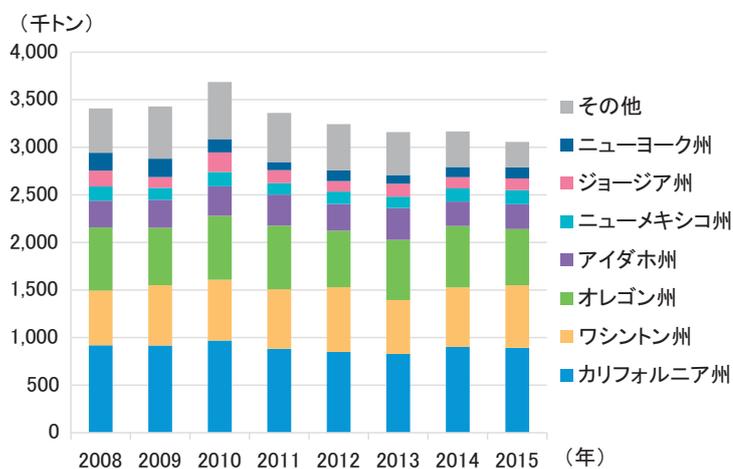
図2 たまねぎの生産地分布



資料：機構作成

注：生産量上位7州。赤枠で囲んだ州は上位3州。

図3 州別たまねぎ生産量の推移



資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

2015年の単収を見ると、非貯蔵用はカリフォルニア州が10アール当たり5.6トン、ワシントン州が同4.3トンであった（表

15）。また、貯蔵用は、カリフォルニア州が4.8トン、ワシントン州が7.7トンであった。

表15 たまねぎの単収の推移

(単位：トン/10アール)

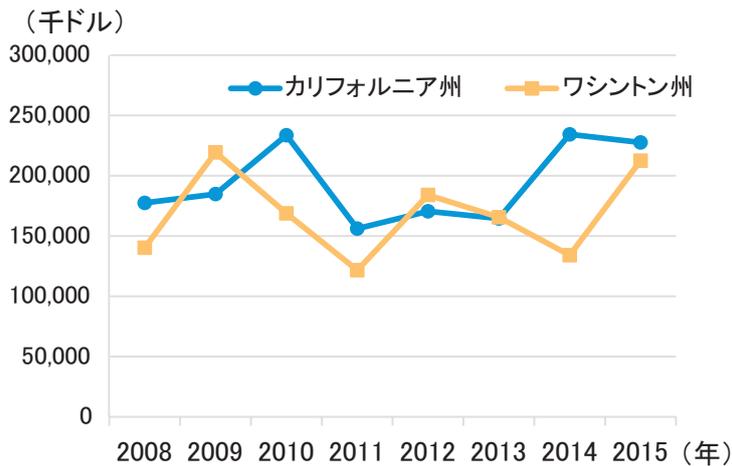
		2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
カリフォルニア州	非貯蔵用	6.3	6.3	6.1	6.1	5.5	6.6	6.1	5.5	5.4	5.6
	貯蔵用	4.8	4.8	4.8	5.1	5.0	4.9	4.9	4.5	4.9	4.8
ワシントン州	非貯蔵用	4.3	4.3	4.0	4.2	3.7	3.9	4.1	5.0	4.5	4.3
	貯蔵用	6.7	6.8	6.7	7.1	6.8	7.3	6.6	6.5	7.3	7.7

資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

近年、たまねぎの生産額は、ワシントン州とカリフォルニア州はいずれも1億米ドル（115億円）以上で推移しており、2015年はともに2億米ドル（230億円）

を超えた（図4）。悪天候などにより生産量が激減した翌年は生産が過剰となる傾向があり、たまねぎの価格が大きく変動する要因となる。

図4 たまねぎの生産額の推移



資料：米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）

ワシントン州では黄たまねぎの生産が8割以上を占めており、主な品種は、コプラ（Copra）、デイトナ（Daytona）、フロンティア（Frontier）、ピナクル（Pinnacle）、テトン（Teton）、タマラ（Tamara）などである。また、同州では、赤たまねぎ（生産量の1割）と白たまねぎ（少量）も生産しており、貯蔵用赤たまねぎの主な品種としては、レッドウィング（Red Wing）、レッドゼペリン（Red Zeppelin）、タンゴ（Tango）、白たまねぎはブランコドウ

ロ（Blanco Duro）などが挙げられる。

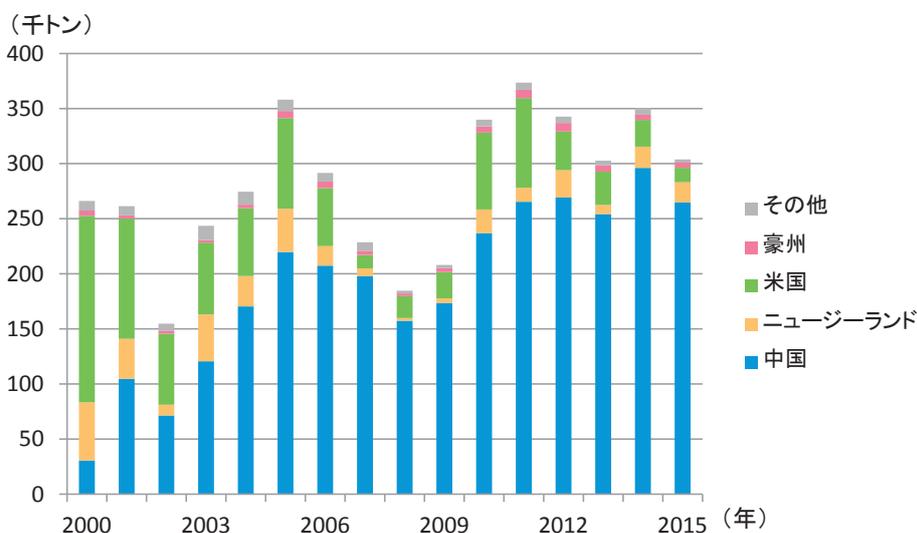
非貯蔵用は、同州ワラワラ郡原産のワラワラ（Walla Walla）が主要品種であり、黄たまねぎよりも3割以上高い価格で取引されている。

日本は、中国、米国、ニュージーランドなどから生鮮たまねぎを輸入している。2000年代初頭、中国と米国がそれぞれ日本の輸入量の約4割を占めていたものの、2003年以降中国産の急増により、米国産の輸入量は減少した（図5）。2011年以降、

米国産の対日輸出量は減少傾向で推移しており、日本の生鮮たまねぎ輸入量に占める

割合は1割を下回って推移している。

図5 日本のたまねぎの国別輸入量の推移



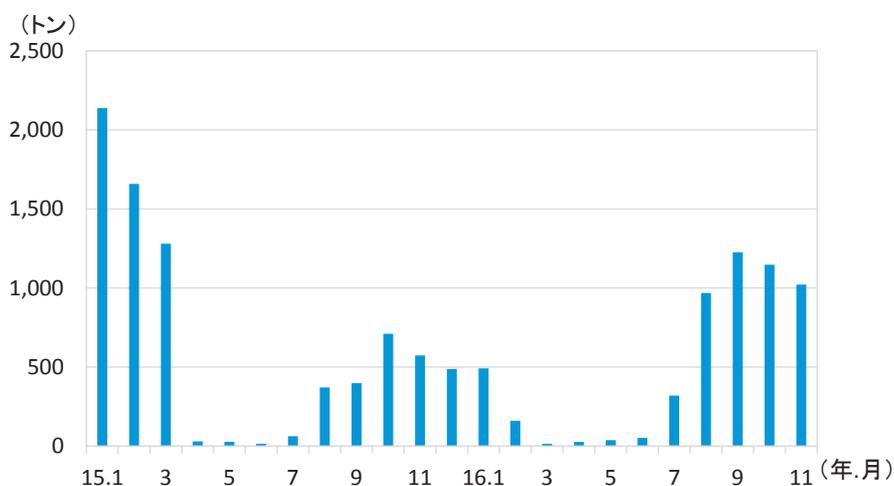
資料：財務省「貿易統計」

2015年から2016年にかけて、日本ではべと病による佐賀県産などの不作などにより、国産の品薄感が非常に強く、米国産も含め、輸入たまねぎの需要が高まった(図6)。しかし、米国産たまねぎの主な出荷先は、米国内市場およびカナダであり、台湾やメキシコ向けも増加したことから、対日輸出の伸びは限定的であった。他方、

2016年7月～11月の対日輸出量は、台風の影響を受けた北海道産の出荷量が減少したことにより、前年同期を上回って推移した。

なお、たまねぎの対日輸出量は、9月～3月に増加する傾向があり、大半は加工・業務用として利用されている。

図6 米国産たまねぎの対日輸出量の推移



資料：米国農務省海外農業局 (USDA/FAS)